

A photograph of a forest scene. In the center, a tall, slender bamboo pole stands vertically. The background is filled with trees whose leaves are turning yellow and orange, suggesting autumn. The sky is a clear, bright blue. The text is overlaid on the image.

風 狂

第 5, 0 号

風 狂 の 会

風狂（第50号）目次

詩

脱ぐ	なべくらますみ
花火	原詩夏至
連帯と社会	高村昌憲
秋が来た	高裕香
北海のぎよろ目	出雲筑三
浮かぶ石の城	長尾雅樹

風狂ギャラリー

三浦逸雄の世界（三十四）	三浦逸雄
--------------	------

エッセイ

菊田守詩集「雨漏」を読んで	北岡善寿
結婚は経済が基本	神宮清志
地上の闇から光を放つ（一）	高島りみこ

翻訳

アラン『大戦の思い出』（十六）	高村昌憲 訳
-----------------	--------

執筆者のプロフィール

頭の方からゆっくりと
時間を掛けて
脱ぐ
着続けていたものが
窮屈になってきたから
誰にも気づかれないように
注意深く
どれだけの時間が過ぎたのか
でも あと少し

これで何回目になるか
繰返してきた独りだけの作業
時には
どうせ同じ模様なんだから
このままでいいじゃないか
面倒くさい と
無精を決め込んだこともあったけど
全身がむず痒くなり
次にはゆるゆると締め付けられてきた
また来たか この感じ

きれいに脱皮の出来た心地よさ
次の着替えまでにはまだ時間がある
脱いだばかりの皮は置いて行こう
とばかり
ゆるゆると行ったのだろう
新しい皮の
着心地を味わいながら

山道の奥に伸びる枝
その先に揺れている
脱ぎ捨てられた
蛇の皮
ちょっとカサついた感じ
主の姿はない

「やっぱり駄目ね夏は。薄汚れて」
新宿区は中井富士見橋の
閑散として巨大な弧の頂
スカイツリーは見えるには見えるが霞んでいて
とてもそのお膝元で今
一日順延した隅田川の花火が
打ち上げられているとは思われない
(というよりそもそもどこなのだ花火は
スカイツリーは見えて花火は見えないとは
そんなにまでも巨大なのかあのバベルは)

「花火ですか。どうです」
「絶望です」
前後に子を載せた電動自転車のお母さんが
ブレーキをかけ
声をかけ
暫く並んで彼方を見やった後
静かに確認する
「その通りね」
とはいえ夕風は意外に気持ちがいい
中井富士見橋がただ家の近くの
閑散とした巨大な弧でしかないことの
思いがけないメリット
或いは徳
「何てことなの。これではTV以下よ」
一応そう批判してみせる妻だが
とはいえ即帰宅して茶の間で
茶を飲みたいわけでもなさそうだ
「どうする、では」
一応そう質問する俺だが
目はそれでもなお
背ばかり高くて意外に華のない
あの老いゆくこの国の最後のやせ我慢の
矍鑠たる孤影を眺めている
「見ようよ、もう暫く。花火の<無>を」
「そうね、折角だし。<無>の花火を」

そう言えば

心の美しい人にしか見えなかった

あの裸の王様の仕立屋の奇跡の服

だが今

俺たちが目を凝らしているのは

本物の

虚妄の

虚空の花

とはいえ それは

東京の 夏の

すっかり薄汚れた夜空にしか

咲かない花

なのかも知れないが

特別な友情を必要としていないから
外国人と直ぐに仲良くなれるのです
強制をお互い必要としていないから
片言の言葉と身振りで十分なのです

特別な感情の友情や恋愛を生むには
言って良いことは注意して言います
行為するにも注意する生活の場所は
此処であって他の処ではないのです

この自然な強制が友情や恋愛にあり
連帯にも自然な結び付きがあります
やがて仲間同士の気儘さはなくなり
虚しい心理学から精神を解放します

どちらかと言うと連帯とは無遠慮で
お互いが和解し難い敵同士の様です
それでもその結び付きは家族の様で
友情や恋愛よりも強く長くなります

気儘で気が合うことよりも愛着です
連帯に愛着があるのを軽視しません
愛着に力があるのは誠実さなのです
従って連帯から社会は生まれません

一筋の稲光と共に夏と友が去った。
熱すぎた思い出も面影も
秋雨が、しとすと流す。

何か残してくれたものがあるのか？
秋に実りがあるように
心の色付きと香りに浸る。

林檎は、青や赤
葡萄は、白や紫
熟した柿は、燃えた炎の色ね。

やがてやって来る冬に備えて
木の葉が舞い落ちるように
喜怒哀楽の情もすべて流してしまう。

ふたえ
二重になったぎょろ目は起こされたばかり
朝まで山林で覆われていたが
ふとんを剥がされかっと睨んでいる

崖の下では自衛隊士が
微振動やまない道を行進している
腕をまっすぐに振って行く

とつぜん露出した崖は
いかり狂うのぼり竜に似る
稲穂はたわわに垂れたまま

今日は久しぶりに蛇口からの音
おいしさに喉元は忘れやすい
隊士たちは黙々と汗を流してくれた

隣のぎょろ目はまだ寝ている
残された縁は足許を見ないようにしている
ぎょろ目の下にはぎょろ目がいる

海の上をふんわりと浮かぶ石塊の
頂上付近に城砦が聳えている
浮かぶ石塊は噴火岩の肌をして
悠々としている
融通無碍の存在は魂が宿っているらしく
空気頭の恰好で
飽和状態で浮上し沈降する

石が軽々と空中を飛べる筈がない

石の内側は空洞らしいとか
紙で作られた風船とか
轟すしい噂話があるらしい

石の城は誰も近付けない
空の上を自由自在だが
ミサイル攻撃なら打ち壊せるか

水平線が洋上に横一線に右に左に延びて
海は捲れるように小波立ち
ぽっかり浮かんだ石の城が
遥かな雲の下をゆっくりと飛行する

目の錯覚か目の異常か

確かに石の塊の上に城が鎮座する
これは何だ
空中を移動する石のグライダーか

石は飛び続ける永遠の時間を越えて



三浦逸雄「ヤギに乗った少年」 8号（アクリル・紙）

ラフカディオ・ハーンの詩人論から何かを取り出して書こうかと考えたが、なかなか踏ん切りがつかない。そんなところへ、宛名が手書きのスマートレターが届いた。菊田守氏からであった。氏はかつて、現代詩人会会長の要職にあった人である。そういう詩人なら著作物は出版社が代送するものだが、何故か自宅からの発送であった。昔風に言えば、私は下下のものであって人様から文学作品を貰えないのが自然である。しかし現代は全てが自然ではなくなった。

前口上はこれまでにして、本筋に入ろう。スマートレターに入っていたものは、何の装飾もない真っ白な表紙に「雨漏」と表題が印刷された詩集であった。私は読んだ。読むのは当り前のことだが、この詩集は私小説的な詩という印象をうける。詩小説と言うべきかも知れない。「幼年」にそれが最もよく出ているのである。

母さんが病気で
奥の座敷で寝ていた枕元に
水アメの壘があった
ぼくは泥だらけの足で
枕元にそーっと這い寄って
水アメをお匙で掬ってなめた
繰り返しこっそりなめていた
母さんが亡くなってから
姉さんに聞いたのだが
母さんは生前姉さんに言っていたという
　　ーマモルはいつも枕元にきて
　　水アメをなめていったのを
　　知らぬふりをしていたんだよ
母さんは何でも知っていた

少年の日の自分の姿をうまく捉えている作品で、母子の絆の底にペーソスが潜んでいるのが感じられる。ここにあるマモルは作者自身の守だか、「雨漏」から生まれ出る名前は高度な洒落である。この家にはどうやら風流人がいたらしい。

子供のとき
わたしはよく叱られた
兄弟げんかをして
柱にしばりつけられたり
夕食のとき
外へ叩き出されたりした
叱る父さんは怖かった
いつもへまばかりやっていたわたし

どこかぬけていたわたし
子供のとき
父さんはよく頓智をいって
みんなを笑わせた
いつか七夕まつりの短冊に
ねがいごとの下に「雨漏」と書いた
わたしの名前は まもる
父さんは私の名前を雨漏と書いた

わたしも老いた
父さんの生きた年を超えてしまった
若い父さんが
好きなお酒を飲んで
満面笑みを浮かべながら
子供たちに
祭りばやしを横笛で吹いて聞かせている
頓智を言っている姿を
思い浮かべている
・ ・ 守 まもる 雨漏 か
いつの間にか降り出した
夜の雨 しみじみと聞いている

病床の母の枕元にそーっと這い寄って水アメを舐めていた少年が、晩年を迎えるに至って、怖かった父を回顧する、所謂思い出はしあわせである。私はこの稿の始めに私小説的詩と言ったのであるが、私小説というのは世間に知られているように自分をさらけ出すことである。ただ、さらけ出すといっても、そのさらけ出しがたは簡単ではない。詩は言語の芸術と言われているのだから、自分で考えるしかあるまい。うまく行けば、読者は感心して読む。私小説が流行した時代、作家は世間に知られたい部分、つまり恥部をさらけ出して関心を引いたのである。しかし詩は散文ではない。現存ではないが、私の知る或るH氏賞詩人は宴会で酔うと真っ裸になって踊ったという。といってその事実を詩に書いたことはない。そういう事実は、言語化するよりも噂に留めておく方が、伝説的な価値を増しがちなものである。これも現存ではないが、六十を越してからH氏賞を受賞した崔華國が「巨匠が巨匠を知る！」というエッセイを書いているのだが、その中に金子光晴が登場するのである。金子は亡くなる二月前に崔の経営する茶房に来て、会田綱雄、桜井滋人の三人で鼎談をするのである。聴衆は六十人で茶房一杯。金子は話の合間に突然聴衆を見廻して、「皆さん、現代詩なんか手帳なんかという雑誌、あれを読んでわかりますか？私は何もわからない。」と、憤懣やる方ない表情であった。一中略一八十になっても九十になっても、純粋に正直に興奮することができ、常に童心を忘れない、これが詩人であることを、更めて諭される思いがした。

この後が、私小説なら面目を施す場面だが、童心忘るべからずを信条にしている崔といえども回天の技はないから散文にして些か品の悪い記録を残さざるをえないのである。

「その夜のこと、高崎のホテルの一室で、ビールを飲んでいた会田と桜井の兩人に、風呂あがりの仙人のような光晴老が、茶目っ気たっぷりな目を輝かして、「どうだい、見くらべっこしようじゃないか、お互いの一物をよう」といって浴衣の裾をたくしあげるのである。顔を赤らめて頭をかいている二人を見据え

て、「なんだ、尻込みするのか、弱虫達だなあ」といって、二人を見下ろしながら、からんからんと笑うのである」

この文章にある「常に童心忘るべからず」は崔が若い頃に朝日新聞の杉村楚人冠に言われた生涯忘れなかった言葉である。それを例証するかのような作品があるのである「高校野球を十倍愉しく見る方法」にこんなところがある。

「私は立ったり坐ったり半狂乱の応援です／インバヌマアーインバヌマアー てめえ達／負けたらチンポちょっと切るかな／ところがこれが我が狂気とともに空しく／見事に負けちめえやがった ああ無情」

崔氏はかつて嵯峨信之氏に「詩はどう書いたらいいのか」と聞いたことがあった。嵯峨は「自分をさらけ出すことです」と言ったという。ここに呈示した詩の断片は杉村楚人冠と嵯峨信之の言うところを忠実に実行した感がある。

自分のさらしかたは人それぞれだが、雨漏の守氏は品の悪いさらけかたはしない。則を超えないのである。身についた徳というものか。「二二二二」という作品がある。その前段は、西洋風に言えばマモル・キクタは日本敗戦の八月十五日は中野区鷺宮国民学校五年生であったという。その少年が平成三十年二月に母校の校長室で校長に面談するのである。そのとき校長は校長室にある金庫をあけて「昭和二十二年度卒業名簿」をとりだしてそれをめくる。すると「二二二二 菊田守 とある」

数行の文章だが、昭和二十年に国民学校五年生であった者が、平成三十年に母校を訪問して校長と面談するのである。その動機は全く解らない。解るのは時間の経過である。昭和は六十四までだから、それから二十年引いて、平成の三十年を加算すれば七十四という数字が出る。如何なる動機で卒業後七十余年にして母校を訪問したかは一言も触れていない。けれども、この後に続く言葉の展開は、国民学校時代の暗い出来事を僅かに覗かせる。僅かであるところに出来事の妙味があるのかも知れない。一応その全文を抜き書きする。

小学生のとき私は泣き虫で弱虫
坊ちゃん刈りをして髪を伸ばしていた
小学校六年生のとき
同級生の女の子数人に囲まれいじめられて
講堂の下に閉じこめられた
あの頃は腕を折って何回も
母親と千住の名倉病院へ通ったなあ。

これはマモル少年受難の記だが、同級生の女子によるいじめは、今日の言葉ではパワハラなのかセクハラなのか。講堂の下に閉じ込められたとなれば囚人扱いである。それに、あの頃は腕を折って何回も医院に通ったというが、その腕は折ったとあって、折られたとは記されていない。そんなことを一々詮索するのは、私が詩の解らない散文家のせいであろう。泣き虫で弱虫で坊ちゃん刈りの髪を伸ばしていたマモル君は女子生徒の嗜虐心をそそったのかも知れない。

思いのほか長くなったので、触れるべき作品はまだあるのだが割愛して終る。 (了)

わたしが慶應義塾の事務職員となったのは二五歳のときだった。これで安定した生活に入れると大いに喜び、四畳半のアパート暮らしに大満足した。それまで一〇か所くらいの職場を転々としてきたが、これからはどんなことがあっても辞めないことを固く誓った。日吉キャンパスに通ってほどなく、その職場に来ていたアルバイトの女性から一通の書類を渡された。そのアルバイト女性は日吉のお屋敷に住むお嬢さんで、青山学院出身である。「ただ見てくれるだけでいいのよ」と言って渡してくれた書類のなかを拝見すると、お見合いの写真と身上書で、具体的には婿養子の話だった。お見合いの相手は会計事務所のお嬢さんで、同い年だった。「冗談じゃない。ボクは会計なんかできないよ」と言うと「それは分かっているわよ。会計士たちを管理してくれればいいのよ」と言う。「会計士を管理する」と言われても何やら雲をつかむような話で、さっぱり見当もつかないのだった。

また少しすると別の職場の年配の事務職員が丁寧に書類を持ってきたが、なかは同じく婿の話だった。受け取ってくれるということがたちまち広まったと見えて、次から次と同じような話が舞い込んできた。あっという間に一〇件くらいの話があったと思う。なかには相手の女性は三八歳、資産一億円という話もあった。学生時代の友人たちに会った時、この話をすると「大いにやれ」とけしかける者も居て「一億円なら騙され甲斐もあるじゃないの」と興味本位に言う女性も居た。月給二万円の頃の話だから、一億円と来てはまさに非現実的な数字だった。友人たちは面白がり、やたら勧めるばかりだった。しかしなかに一人、新潟から婿養子に入った男が居て、彼は言った。「お前に婿が務まるわけがねえ」これは重い言葉だった。また別の先輩は言った。「どんなに貧乏しても自由に勝るものはない。いくら財産があっても、それが自由にならないのでは意味がない」こうしてこれらの話は消えて行った。

極貧育ちのわたしにとって、こういう話が簡単に無視できるというものでもなかった。慶應というブランドに就職したから、こんな話が舞い込んだということになるので、捨てがたい気分があった。客観的に見れば、わたしのように末っ子で親も居ない、見てくれは慶應の職員という世間体はいい、こんな男はまさに婿様にもってこいだっただの。

それからいきなり二五年後のことになる。わたしは「普通部」という中学校に異動になって、その二、三年後に親と苗字の違う生徒が三人入学してきた。これは親が離婚したのだろうかと思ったが、そうではないことがすぐに分かった。世間全体が婿養子を取ることが困難になり、その方策として娘を嫁に出して、生まれた男を養子に取るという方法が一般化していったらしい。その結果中学校入学の頃にはまだ親元に居るけれど、戸籍は祖父のところにいるというケースが出てきたわけだった。ほかの部署に行ったときこの話をすると、ある男が自分もそのケースで、結婚するとき生まれた男の子を嫁の実家に出すという約束だったと話してくれた。道理で彼は四人の子供を持っていた。せいぜい二人の子供というのが普通なのに、四人も子供が居るという理由がこれで判った。今の世にはまだ家を継がなければならない家系というものが存在している。そこで男が生まれないと、どうしても男を養子に取るが必要になる。婿に来てくれる人が居ないという現実は厳しいものがある。そこで考え出されたのが、娘を嫁に出すけれど生まれた男を貰うという、これもひとつの知恵というものだろう。なるほど上手い方法だなと感心した。

まだ独身だったころ、婿の話が次々と舞い込んで、結局見送ったのだが、自由がいいということばかりがその理由ではなかった。そもそも結婚というものは、好き合った男女が結ばれるものだという観念があった。まず愛があって、その先に結婚という現実があるのが、なんとしても正しいと思い込んでいた。よって婿の話に世間というものがもっている、ある種の薄汚さを感じてしまったことは事実である。どこか打

算的ではないか、そういう思いが、この巨大な資産を見送る大きな要素だった。それから家庭をもち子供を育てて、世間という俗っぽさを身につけた中年に差し掛かっていた。「普通部」に行って婿取りの困難さの打開方法を知り、上手い手だなと感心するに至ったのは、結婚観にいささかの青臭さが消えつつあったからだろう。

結婚して数十年が経過して、結婚というものに対して独身時代とはかなり違った見方をするようになっていた。このひとでなければ結婚は出来ないと思うのは錯覚であって、一時的な迷いでしかないと気付いた。ランダムに五人の女性が居れば、その中に結婚生活してゆける女性は必ず居ると思う。仮に絶海の孤島に男女二人が置き去りにされれば、二人は必ず一緒に暮らすであろう。

結婚生活というものは「愛」よりも「経済生活」の占める要素が大きい。古来結婚して一つのホームを作るということは、経済生活のより安定した態勢作りなのではないか。婿を取ってその家の繁栄を持続させようとするのも全く同じなのだ。よってこの婿取りは正しい。「快樂のために恋愛し、利益のために結婚せよ」とは西洋に古くから伝わる諺である。ずいぶん露骨な表現ながら、納得できるひとも多いのではないだろうか。

趣味のひとつである古代史に分け入っているいろいろ彷徨っているうちに、人類の結婚形態が一夫一婦制となる前に「群婚制」という形があったことを知った。「群婚制」とは、ある兄弟が別の兄弟と共に暮らすようにすることである。つまりセットで一緒になり、一つの家族を作る。人類にとって性欲を満たすより食欲を満たす方がはるかに重要であり、また困難なことだった。これは現代でもそれほど違ってない。世界の人類の約半分が飢えに苦しんでおり、アフリカでは一〇秒に一人が餓死しているのだ。古代人たちが原始的な農耕を進め、かつ採集と狩猟によって食料を確保するには、一定以上の人数が家族として協力し合うことが絶対必要だった。この背景としての群婚制だった。生まれた子供は母親のもとに育てられ、母系社会となる。血縁関係による氏族社会では、女権が大きく、その社会の指導的役割を担っていた。食料は平等に分けられる。女権社会は平等な社会である。群婚制では、乱婚または雑婚の様相を呈し、たまたま近寄った男女が性的関係をもつのは自然なことであった。

母系社会が平等な社会を形作っている間は、男女関係も平等であり自由であったけれど、やがてそれは崩れて行く。農業生産に余裕が出来てくると、しだいに男が主役になって、農業はもとより土器生産などの手工業も男が主導権を握るようになる。公共財産制から私有財産制へと進み、交易なども盛んになり、その主権が首長の一手に握られてくると、いよいよ貧富の差がはっきりと出てきて、結婚形態も一夫一婦制が主流となっていった。そして女の地位は下がり、女は男の私有財産のようなことになってきた。とくに地位の高い者には一夫多妻のようなことも始まる。一般民衆は貧困で、家庭内では女の地位もそれほど低くはなかった。こうなってくると、その後の結婚形態とほとんど変わらなくなる。といっても現代のような一夫一妻制に一挙に移行していったわけでもなかった。

その後紆余曲折はあるものの、現代の結婚状況はこの延長線上にあるようだ。ただしそう一括りに論ずるのはいささか乱暴な話だ。今の一夫一婦制には、道徳とか民法とか、宗教上の約束とか複雑な要素が絡み合っただけで進んできている。とはいえ結婚生活というものには、経済が基本に置かれているという本質はひとつも変わっていないと思う。(了)

『趙根在写真集 ハンセン病を撮り続けて』をめぐって

東京都東村山市にあるハンセン病療養所のひとつ、多磨全生園（たまぜんしょうえん）。その広大な敷地の一角に国立ハンセン病資料館が建っている。かねてから行きたいと思っていた資料館に、今年の7月下旬やっと訪れることができた。

受付で簡単な手続きを済ませ資料館を一巡して、再び受付に戻ってきたとき目についたのが、B4変型判モノクロの分厚い写真集『趙根在（チョウグンジェ）写真集 ハンセン病を撮り続けて』（草風館刊）だった。定価5000円のところ、割引の3000円で販売されていたこともあって、さっそく購入した。同時に2014年と2015年に資料館で開催された趙根在の写真展のカタログ『この人たちに光を』もいただいた。この写真集とカタログから趙根在（1933～1997年）の残した仕事とハンセン病について綴ってみたい。

趙根在、日本名・村井金一（むらいかねいち）は1933年、北朝鮮から土掘り人夫として来日した朝鮮人の9人兄弟の末っ子として、愛知県で生まれた。趙は15歳のとき、家族を養うとともに父親の胃がんの治療費を稼がねばならず中学校を退学、亜炭鉱山で働き始める。坑内労働は18歳以上と労働基準法で定められていたため、趙はかなりの苦勞を強いられたようだ。それでも3、4年経った頃には趙もりっぱな炭鉱夫となっていた。しかし彼の心のうちでは次第に地底の暗闇から地上へ、光への脱出願望が抑えきれなくなっていた。

1960年、27歳で炭鉱を後にし、上京。翌年、映画プロダクションで照明の仕事に就いた。その年の初夏、趙は初めて多磨全生園を訪れている。なぜ訪ねようと思ったのか、手記には「福井のヤマ（炭鉱）で思いついた」と綴っているだけで、詳しい動機は書かれていない。

多磨全生園を訪れた趙は入口の門衛所で、「なかに朝鮮の人はいるのだろうか、会うにはどうしたらいいのか」と訊ねる。園は大変好意的だったようで、すぐに同胞組織との面会が叶い、そのなかのひとり、金子保志さんに園内を案内してもらうことになった。園内には病棟や患者の宿舍の他に様々な作業所、広大な農場、動物飼養舎、鉄工場、理髪所などがあり、「〈社会〉にある仕事は全部ある」という金子さんのことばに眩暈を覚えるほど驚くのだった。患者が消防ポンプを引いて走り、棺桶を手造りして、死者を焼く……。そこにはひとつの町が形成されていた。それは当時のハンセン病療養所がいかにか〈社会〉から隔絶された場所であったかを物語っているともいえる。1943年、アメリカで「プロミン」という特効薬が開発され、1947年からは日本でも治療が開始、治癒する病となっていたが、たとえ誤診であったとしても一度「ライ（かつてのハンセン病名）」として収容されると二度と故郷に帰ることはできない、そんな時代であった。

趙は狼狽しながらも、金子さんの作った冷や麦とサンマの生干しの昼食を御馳走になり、再度の訪問を約束して園を後にするのだが、そのときの思いを趙は次のように綴っている。

「東京の多磨全生園を訪ねて感じたことは、太陽こそ頭上に輝いているけれど、同胞をふくめて、この人はかつて私が地底で体験したような出口のない闇のなかに閉じ込められているのだなということでした。人間として、それは堪えがたい苦しみに思われました。出口を開き、自由の光をあてることは、私には、全く不可能としても、願望を伝えることはできるかもしれない。いや、出会った人々のことを考えてもしなければならぬと思ってしまったのです」

そして趙の脳裡には「彼らを写真に収める」が思い浮かび、1ヶ月後の7月下旬、カメラとフィルムをカバンに入れて、再び多磨全生園を訪ねるのだった。（つづく）

第十三章

私たちは五月頃に交替させられました。或る晴れた日の夜に、全ての班が補給車の中で移動しました。しかし喜びも混じっていました。偶然により、或る砲撃で私たちは道に沿って行きました。私たちは爆発を、音響を聞く前に、大気現象の如く見ることが出来ました。馬たちは大急ぎで行きました。私たちも間もなく安全な所にいました。ロワイオメイで宿泊しましたが、私が王の様に眠ったのは屋根裏部屋でした。翌日は葡萄酒と豚肉の日になりました。私は、師団が取得した軍隊の灰色で塗られた二輪馬車で、御者と一緒に旅をしました。中尉は代弁者の務めを私に依頼しました。「何故なら、将軍は規則に則っていないこの乗物に気付いて、あなたに説明を求めることはあり得るからだ」と彼は言いました。私はソーセージを全て食べながら、答えの準備をしました。そして実際に私は、私自身は軍人は願い下げで、その種の他のことも願い下げであると説明しました。軍人たちが立派な話に無関心であると信じるべきではありません。しかしながら私には説得力を必要としていませんでした。そのうちに私たちの小さな縦隊を批判するのを見出していた連隊長が現れたのです。勿論、彼は私の知合いでしたし、二輪馬車のことも知っていました。私は立って敬礼しました。私のアキレウスである二輪馬車の上では優雅でもありました。その後の日々は睡眠と饗宴でした。ムーズ県は楽しかったです。私にはやるべきことは何もありませんでした。師団は私を招待客扱いにしてくれました。しかしながら私は兎に角、砲兵中隊に再び一緒にならなければなりません。私は、昔の私の生徒で何事にも非常に厳格であったG大尉の命令権下で過ごしました。全く親切でしたが最早私の上官でない様なT大尉と共に、この第十四連隊の若いG大尉の家ではやはりコレージュの生徒の昼食にはなりません。そこで私が大変に僅かな時間ですが、既に十分に知ったのは金モール二本で庇の無い帽子に白い十字架のある牧師でした。学者ぶっていてお喋りの彼は、あらゆるありふれた考えを上手く操って言っていました。彼は私たちの昼食を台無しにして仕舞った様です。若いG大尉は、ムーズ川沿いの草原を自由に走っていた彼の馬たちを私たちに見せてくれました。そのことについて我々の仲間であるT大尉は言いました、「あなたは運が良いですね。もし私が自分の馬たちを走らせたなら、脚を折るか溺れるかするでしょう」。これは奴隷からの困難な自由への移行であり、彼の同僚が答えたのです。楽しい話をして時は早く過ぎました。帰りしなにG大尉は、私が午後を何処で過ごしていたのか、そしてもし自分の休暇が取れずにこの場になかったなら私は退屈したに違いないことが大変に良く分かりました、と私のことを言いました。これは彼が私に示した唯一の特別待遇のしるしです。兎に角、彼はそれを私にしなければなりません。

私たちは何時も戦争よりも一歩進んで、村から村へ行きました。しかし、ヴェルダンへ行くことを前提にしていました。誰もが順番にそこへ行きました。それは本当のことでした。私は道路での事故で出発に失敗しました。私は殆ど全ての宿泊を司令官の老いた馬上で行いましたが、それは私には慣れっこになっていました。私は従順なこの動物が自慢でした。しかし、馬術は穏やかなものであっても、最初は疲れます。私は軍用運搬車に席を取りました。車の揺れは半分程の障害物でも私たちをひっくり返しました。そして、馬たちがそこから私たちを引っ張りましたので、私は足を車輪に取られて折れたものと思いました。しかしながら、苦痛そのものの上に輝いていた考えも大変良く思い出します。私はひっくり返りましたので、半分ぼうっとなっていました。「戦争は私にとっては終わりました」。私には信じ難い喜びでした。でも、この喜びは大変に心にも無いものです。何故なら、うんざりして良いものでも何でも癒やすからです。従って希望は々裏切られます。私は、歩兵の鏡であるサンピックの様な人物を思い出しておりますが、彼は結局

熱を出して幸運だったのです。彼は本当に熱を出しました。従って本当に幸運だったのです。それはフリレイの町に入る際に、私の部署で起きました。ところで彼は自分の病気を発見するにつれ、この幸運が彼を治したのを私は見ました。私にとっては、戦場の埒外にいることの幸運で、歩兵たちに欲しいと思う気持ちにさせた驚くべき捻挫の苦痛にも容易に我慢しました。話が先に行き過ぎます。今は病院を探し求めて私はロレーヌ地方への道で、あの二輪馬車の中に居りました。かくしてその夜に、私はタントンヴィルに到着して、荷物の様に降ろされました。病院は良く知られているレストランの中にありました。それは軽傷者のための小さな病院でしかありませんでしたが、戦闘地域における行政権に含まれていました。これは彼らにとって重要でした。病院内においては治らないでいても気楽です。しかし、足を痛めた人々においては回復だけが問題になっていて迅速に扱われます。そこにいたのは捻挫が二人、斧の一撃で負傷した者が一人、車の事故が一人、ヘルニアが一人、フルンケル（1）が二、三人、リウマチが一人、その他は軽傷者たちです。捻挫をした二人以外は、誰もが多少なりとも走ることが出来ました。捻挫をしたもう一人の者はチェスで遊んでいました。彼は幸運でした。マッテイと自ら名乗っていたこのイタリア人は、イギリス軍の志願兵を募集するための軍隊の呼びかけによってアルゼンチンからやって来ました。彼は現在ではロレーヌ戦線で移動衛生班の車の運転手をしていましたが、足が動けなくなっていました。夏の到来がまさに告げられました。病院中の病人や看護婦や医者たちは、私たち二人を除いて田舎へ出掛けました。この状況の中で私たちは、將軍の肩書を持った検査官の医者を極めてきちんと迎え入れましたが、彼は私たちの前では愚かな儘でした。これはまさに彼の芸当だったのです。チェスの勝負が全てであったマッテイは、イタリア人とか恐らくイギリス人が行う何らかのくすくす笑いを口に出していました。そして、この状況に引き込まれた私も、驚くべきことに愚かな人間の振りをしていました。私は誰が茂みを砲撃したのか知りませんでした。病人や医者や看護婦たちが戻って来るのが見えました。そして、あの検査官の声が部屋に鳴り響きました。「私は何を発見するのだろうか。一種の〈イギリス人〉とその相手の愚かな人間であろうか。又は文盲とか何かであろうか」。看護婦たちは笑いこけて死にそうでした。というのも私の万年筆とノートブック、そして私が持ち回っている鞆の中にある『谷間の百合』と『パルムの僧院』の二冊の小説には敬意が表されていたからです。看護婦たちは尊敬するだけで満足していました。しかしマッテイは何らかの救いと共にバルザックを発見していました。『谷間の百合』の私の序文は短いものでしたし、次の様な内容です。「これはナポレオンの百日天下の間のトゥーレーヌ城の話です」。これはそんなにも悪いものではありませんでした。センスのあったマッテイは、フランスの小説を大変簡単に沢山読みましたけれども、バルザック風の語彙や、文学的言葉に属していない農業のことには無知であったことに気付いたと言っていました。このバルザックが有名な作家であったかどうかを私に尋ねながら、存在に値したこともつけ加えながら彼は推論しました。そのことによって栄光は様々な外観の下に表れるものであると私には思えません。私が床の上で足を引きずり始めた時、マッテイは回復していました。それはチェスの終わりでした。

私はこの大戦の間に、チェスのゲームを沢山の仲間たちに教えました。そして、大変に共通した間違いに私は気付きました。それは彼らがゲームのルールを理解した時、最早決して相手にぶつからないことが安全であると思うことです。若い者たちは精神に高尚な観念を持ちました。チェスのゲームで気付くことは、如何なる事件も無ければ術策しか無い如く、全てが準備されて計算されていなければならないことです。しかし、数々の関係の複雑さが閉じられていますけれども、思いがけないことが沢山ある、一種の〈宇宙〉を直ぐに作ります。それは人間の手による一つの偶然の様なもので、最早感動しかありません。もしもそれが無かったなら、全てを計算する競技者たちがゲームの楽しさを失うことは間違いありません。私のために、そして純真な相手の前で、私はパニックと驚きを生み出しました。情熱に賭けました。しかしながらマッテイと一緒にすと、二、三人の人々と一緒に私は精神力が決して間違いを改めないことを覚えました。無鉄砲と計算の丁度真ん中に私はこのゲームが与え得る、恐らく最も生き生きとした喜びをそこか

ら引き出しました。その様に程々に取り憑かれると、それはまさに戦争の一つのイマージュになるのです。

もしも考えることが無ければ、人は病院で何をするのでしょうか。私は電話局で哲学者たちの哲学の手ほどきをすることが出来た一種の〈概論〉を書き始めましたが、少なくとも大学の教授たちのものを手ほどきすることではありませんでした。最初の観念はバカロレア合格者の質問が私に齎されました。彼は、デカルトの「我思う、故に我あり」とは何であるのか、ロックに代わってその哲学に存在した一つの形式を尋ねて来ました。私はひどい語呂合わせで答えました。「我好む、故に我あり」。しかし、その質問は道を進んで行って成功しました。そのバカロレア合格者はドイツ語を知っていました。彼はナウエン（2）からの公式声明を訳すのを引き受けましたが、それは私たちの無線技師が一文字ずつ受け取ったものです。この歩兵はそこを離れたので、私はドイツ語のこの公式声明を毎日待っていた作戦区の将校たちへ渡し始めました。激しい抗議文も幾通もありました。その後、私よりも殆どドイツ語を知らなかった化学者に助けられて、私は外国語翻訳交通隊を巻き込みましたが、私は心配しています。というのも専門語の意味は、長時間調べた後でないと明らかにならないからです。この紆余曲折があった後で、私は〈概論〉に戻り、病院で終えることが出来ました。そして、それは『精神と情熱とに関する八十一章』の表題で大戦の終結前に出版することになりました。この本は余り大学教授を意識していない様に思えます。でも、戦争はそこから消えていました。

真の問題は、人々が苦難している時には至る所に置かれています。その病院も戦争だらけでした。歌でさえもそこでは恐るべき音響になっていました。疲弊した連隊が通過しました。リュックサックで体を曲げた新兵たちを眼にしました。私は、歩くリズムを急がせる息切れのする喇叭の様な音が今でも聞こえて来る様です。青春時代は歳を取ってどうかして仕舞ったのです。私たちのベッドの上では、どんな歩兵も一日とか二日の間、ヴェルダンのことを考えているのが見られました。若い軍医が彼らを上手に治療しました。軍医はリウマチ患者を探していました。そして上手く発見しました。その様にして軍医は一週間とかそれ以上看病しました。しかし話す言葉は悲しいものであり、そして最悪の沈黙がありました。現世はこうなのです。神は、掃いている司祭の姿をして私たちの間にいましたし、大変下手に掃いてさえもいました。神は私たちに箒を渡して逃げましたが、その代わりに兵隊の大外套の下に、私たちの心を温め直すミサという一種の葡萄酒を持って来たのです。この哀れな人間は概略を掴んでいませんでした。私は、新聞に出ている大虐殺の記事を読んだ時の愚か者に対する恐ろしい動作を彼に見ました。彼は一頭の馬を笑うことが出来るのと同じ様に笑いました。しかし待って下さい。日曜日に私たちは女性や子供たちの限りない流れの中に、戦争の不気味な行列が通り過ぎるのを見ました。葬式だらけでした。時代に倣っての〈聖体の祝日〉だったと私は思います。群衆の列には常に敬意が払われます。しかし、その終わりに私たちは何を見たのでしょうか。金色に着飾った我々の看護人という愚者は、移動天蓋の下で神を持っていました。若者たちに私は何らかの信仰心や祈りの欠片も見なかったのですけれども、その日から彼らはそのことを考え始めました。お分かりの様に私には思想は、常に窓辺によって発見する様になりました。

マッティは自由思想家でした。この言葉だけは私にはどんな職業よりも重要です。しかしながら私は気の弱い話を恐れました。その点に関して私が言うのは一つだけで、ナンシーの看護婦長と彼との会話だけです。彼はミサへ行くことも、聖体を拝受することも拒んでいました。その夫人は、彼が犬の様に生きて死ぬことがまさに自由であることを単に彼に忠告しました。その時にマッティは知識が無くてもソクラテスになったのです。彼は言いました、「犬の様に生きることですか。私はそれが何であるか分かっています。というのも犬たちは立ち上がりますし、飛び上がり、ついには角砂糖を貰うためには何でも構わず行おうのを私には分かっているからです。そうではないのでしょうか。大変結構です。しかしその時、あなたが望んでいることを行う私の哀れな仲間たちに、あなたが用意しているカフェ・オ・レやその他のものの特別待遇を手に入れるのと引き替えに、もしも私がミサや懺悔等々へ行ったなら、その時は私が犬として生きて

死ぬだろうと私には思えます。あなたは本当だと思いませんか」。この女性の精神を明らかにするのに必要なものがありました。しかし、看護婦長は色を塗られた偶像でしかありません。

我々の看護婦たちは、恐ろしい移動衛生班において形づくられたもう一つの様相を呈していましたし、私たちの家で休息していました。私は三つの動きだけでベッドを仕上げる彼女らのやり方に感嘆しました。決定的な時間での感嘆を私は、彼女らに発見したのです。その上、彼女らが口論で熱くなった時には、あらゆる名前に通じていました。彼女らは私が薔薇とヒナゲシが咲く戸外へ行く一歩目を支えてくれました。彼女らはどんな歌でも歌いました。日曜日には、私たちは一人ひとりが冷たいビールの水差しを受取りました。私は冷たいビールが何であるのかを知りませんでした。皆殺しの天使（3）によって、私たちはこの楽園から分散させられました。彼は確かに秩序だった新しい医者であり、それらの秩序は自然に適していたものです。私たちは全快したいと思っていました。私の捻挫も同じで、すっかり薔薇色になって列車に乗らなければならなくなり、私に約束されていた二十日間の休暇もたった一週間になっていました。私は自分の本分に身を引き締めましたし、不足するものは何もありませんでした。しかしその中で私は、精神力が打ち破られているのが分かりました。私はゴンティエから何通かの手紙を貰いましたが、慰めにはならないものでした。砲兵中隊はヴェルダンにいて、砲弾がそこを叩きのめしていました。シャンパーニュでは砲弾が脇に落ちましたが私たちには全く自然であると思われた、と彼は書いていました。何故このヴェルダンでは砲台や避難所に正確に落ちたのでしょうか。少し後で私は、飛行機の偵察による調整が全ての理由を説明しているのを知りました。実際にヴェルダンでは、敵の飛行機も砲台による一斉砲撃を絶えず調整していましたが、シャンパーニュでは行えなかったのです。我が軍の数々の飛行機がそれを阻止していたのです。彼らは大空の勇者たちです。（完）

（1）フルンケルは、黄色ブドウ球菌による毛孔皮脂腺の炎症である。

（2）ナウエンは、ドイツ北東部の都市名である。

（3）皆殺しの天使は、神がエジプト人の第一子を皆殺しにするために遣わした天使で、聖書の「出エジプト記」に記されている。

執筆者のプロフィール（五十音順）

出雲 筑三（いずも つくぞう）

一九四四年六月、東京都世田谷区下北沢生まれ。千葉工業大学工業化学科卒。混迷と淘汰のたえない電子部品の金めっき加工を手掛けた四十五年を無遅刻無欠勤で通過した。芝中時代は実用自転車 1000m タイムトライアルで東京都中学新記録で優勝、インターハイでは自転車ロードレースでチーム準優勝、立川競輪場での個人 2000m 速度競争において総理大臣杯で三位となった。趣味として歴史と城物語をこよなく信奉し、日本百名城に挑戦中である。仕事面では日本で最初の水質第一種公害防止管理者免許を取得、そのご東京都一級公害防止管理者、職業訓練指導員免許など金属表面処理技術者として現役で勤務している。三行詩集『走れ満月』（二〇一一年三月）・『波濤を越えて』（二〇一二年九月）・『五島海流』（二〇一七年五月）を出版。埼玉県所沢市在住四〇年になる。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

北岡 善寿（きたおか ぜんじゅ）

一九二六年三月十日生まれ、鳥取県出身。文化果つる所と言われたばかりか、県下の馬鹿の三大産地の一つという評判のあった農村に生まれ育ち、一九四三年に出来の悪い生徒が集まる地元の中学を出て上京したが、一九四五年三月現役兵として鳥取連隊に入隊。半年後敗戦で復員し再上京。酒ばかり飲んでいる無能なジレッタントにすぎなかった。大学のころは今は故人の北一平や東大生の本郷喬らと同人誌「彷徨」で一緒。一九七四年文芸同人誌「時間と空間」創立同人。二五号から六四号（終刊）まで編集担当。一九九四年「風狂の会」会員となり現在に至る。詩集『土俗詩集』（一九七八年）、『高麗』（一九八六年）、『榎』（一九九一年）、『痴人の寓話』（一九九四年）を出し、詩集以外のものとして随筆集『つれづれの記』（二〇〇三年）、『続・つれづれの記』（二〇〇九年）、『一読者の戯言』（二〇一四年）を出版。日本詩人クラブ永年会員。日本ペンクラブ会員。風狂の会主宰者。

高 裕香（こう ゆうか）

一九五八年二月二日生まれ、大阪市出身。幼い頃から、日曜日になると父親に大阪城公園に連れていってもらい公園中を駆けめぐる。菜の花畑やレンゲ畑で ちょうちょうやトンボを追いかけたり、おたまじゃくし、ザリガニを取って遊んでいた自然児。なんとなく父からルソー教育を受けていた。五歳からピアノを習う。大阪基督教学院の児童教育学科を卒業後小学校教員になる。現在、東京韓国学校で日本語の講師を務めている。日本語教育学会会員。ヤマハピアノ P S T A 指導者。「心のアルバム」・「虹の架け橋」・「赤い月」・「日韓文化交流合同詩集」などのアンソロジー詩集に参加。二〇〇七年度「民団文化賞」優秀賞受賞。二〇〇九年、二〇一一年度「民団文化賞」佳作賞受賞。日本詩人クラブ・時調の会・世界詩人会議各会員。

神宮 清志（じんぐう きよし）

一九三七年一月九日、盧溝橋事件のあった年、徳富蘆花の住処の近く（東京府千歳村）で生まれ、幼年時代をそこで過ごした。二歳で父に死に別れ、敗戦前後の混乱の中、引っ越すこと十回あまり、小学校時代から働き、冬でも素足で過ごすという貧困の中で育った。大学卒業後サラリーマンとなって暮らしは安定し、三十歳代半ばに能面師に弟子入り、以後三人の師匠についた。個展四回、団体展出品多数、最近では創作面も作り、イエス、ジャンヌ・ダルク等も作成した。能面制作はほぼ毎日ながら、最近は視力・体力の衰えもあり午前中のみ、午後は筋肉トレーニングとボールルームダンスに打ち込んでいる。いっぽう随筆同人誌

「露」に四十年ほど在籍して、二百二十編の随筆を発表してきた。手作業をしていると、思いと考えが限りなく浮かんできて、書かずにいられない。いわば物狂おしいため息のようなものか。

高島 りみこ（たかしまりみこ）

一九六〇年高知県生まれ、東京都在住。

日本詩人クラブ会員

詩誌「山脈」「花」同人

詩集『海を飼う』（二〇一八年）

高村 昌憲（たかむら まさのり）

一九五〇年三月、静岡県浜松市生まれ。明治大学文学部（仏文専攻）卒業。詩集『螺旋』（一九七七年）、『六つの文字』（二〇〇四年）、『七〇年代の雨』（二〇一〇年）。評論集『現代詩再考』（A & E・二〇〇四年）。翻訳『アランの「エチュード」』（創新社・一九八四年）、アラン『初期プロポ集』（土曜美術社出版販売・二〇〇五年）、ジャン・ヴィアル『教育の歴史』（文庫クセジュ971・白水社・二〇〇七年）。共同編纂『齋藤詩全集』（土曜美術社出版販売・二〇〇七年）。一九九八年「現代詩と社会性—アラン再考—」が詩人会議新人賞（評論部門）。二〇一二年からパブの電子書籍に、随想集『アランと共に』（全3巻）及びアラン作品の翻訳『一ノルマンディー人のプロポ』（全5巻）『神々』『わが思索のあと』『思想と年齢』『ガブリエル詩集』『精神と情熱とに関する八十一章』などを登録中。日本詩人クラブ会員・日本仏学史学会理事

長尾 雅樹（ながお まさき）

一九四五年生まれ 岩手県出身

詩と思想研究会所属

既刊詩集

『悲傷』『山河慟哭』『長尾雅之詩集』

日本詩人クラブ理事長

なべくら ますみ

一九三九年 東京世田谷生 日本大学文理学部国文学科卒業

日本現代詩人会・日本詩人クラブ・時調の会各会員

樗自由詩の会同人

詩集『同じ空』『城の川』『色分け』『人よ 人』『川沿いの道』『なべくらますみ詩集』『大きなつづら』

エッセー集『コリア スケッチラリー』（共著）

訳詩集『花たちは星を仰ぎながら生きる』（韓国・呉世榮）他

原 詩夏至（はら しげし）

詩人・歌人・俳人・小説家。一九六四年生まれ。東京都中野区在住。著書に詩集『波平』『現代の風刺二五人詩集』（共著）、句集『マルガリータ』『火の蛇』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞俳句部門努力賞）、歌集『レトロポリス』（第十回日本詩歌句随筆評論大賞短歌部門大賞）『ワルキューレ』等。小説集『永遠の時間、地上の時間』。

日本詩人クラブ・日本詩歌句協会各理事。

日本現代詩人会・日本短歌協会・現代俳句協会各会員。

三浦 逸雄（みうらいつお）

一九四五年四月二日 札幌郡琴似町で生まれる。

一九六七年上京し 高円寺フォルム美術研究所、新宿美術研究所に通う。

一九七〇年スペインに渡り、マドリードの美術サークル Circro de bellas artes で人体デッサンをかさねる。帰国前の一年は、ベラスケス、グレコ、ゴヤ、ムリーリョを見るために、プラド美術館へ足繁く通う。

一九八三年に帰国。

一九七五年以降、現代画廊（東京・銀座）、東邦画廊（東京・京橋）他で作品を発表する。

（以上）

同人誌風狂（ふうきょう）第50号

2018年9月21日登録

<http://p.booklog.jp/book/123553>

編集：風狂の会（担当：高村 昌憲）

編集担当者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/masanorit/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/123553>

電子書籍プラットフォーム：パブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト